

ジャン・ヴァールの思想における「実存」と「超越」

押 見 ま り

押見 まり

要旨

ジャン・ヴァール〔Jean Wahl, 1888-1974〕は、20世紀フランスの哲学界で中心的な役割を果たした哲学者である。しかし、華々しい経歴を持つにもかかわらず、ヴァール固有の思想についての日本での研究は未だ不十分である。

そこで本稿では、ヴァール固有の思想を抽出することを目指し、『人間の実存と超越』（1944）を通してヴァールの思想における「実存」と「超越」の観念がどのようなものか検討する。

最初に、『人間の実存と超越』におけるヴァールの哲学的営みの意図を画定することを目指し、たびたび用いられる「アンチノミー」という概念の意味を考察する。その際、手がかりとなるのが後年の著作『形而上学概論』および『形而上学的経験』に見られる「相補性」の概念である。ヴァールは『形而上学的経験』のなかで、二律背反を超える方法としてこの「相補性」を提示し、さらには総合や弁証法に置き換わりうるものとして指定している。ヴァールが「相補性」によって二律背反を超えるようとするのは、諸哲学的直観の源である「人間に直面する實在」を説明するためである。この實在とは哲学的問題をめぐる「経験」と考えられる。ヴァールによるとその源に迫るためには、諸直観の展開である弁証法自体も弁証法化され、他者とのかわりによって説明されねばならない。それゆえ、弁証法に「相補性」を適用し、弁証法の他者たる「形而上学的経験」を描こうとしたのだ。

弁証法へのこのような姿勢は『人間の実存と超越』においても看取される。ゆえに、同書における方法も後の著作の「相補性」と同様と考えられる。すなわち、『人間の実存と超越』では、ある問題の「経験」を指し示す諸見解の対が「アンチノミー」と名指されているのだ。このような方法は、ヴァールの哲学的営みが単なる哲学史記述ではなく、哲学史の記述を方法とする「哲学」であったことの証左である。

ヴァールは「実存」の観念について、「緊張関係」という形で対立し合一する「内部の努力と外部の抵抗」が実存を定義すると言う。そして、このアンチノミーを構成するのが、「分離・不完全性と成就・完全性」としての実存の観念である。しかしヴァールによれば、「具体的な」実存には「他者」と「内容」が必要である。それゆえ、具体的な実存は「他者」と「内容」に対する、「自己への再入と自己の外への退出」というアンチノミーが指し示すものとなる。したがってヴァールの考える実存とは、分離するとともに完全性として成就する構造を有し、「内容」と他者との間で、自己の内へ入ることによって自己の外へ出ることなのだ。

次いでヴァールは、「超越」の観念を「運動」と「終着」というアンチノミーとして指定し、運動する超越における内在と超越の関係に着目する。ヴァールによ

れば、内在や超越は単独で思考されえず、超越あるいは内在のひとつの方法としてしか捉えられない。この意味で、内在と超越は対立項でありながらも不可分な関係にある。かくて、内在と超越の両者もアンチノミーを構成する。そこからヴァールは、「超越する」ことで「内在する」ことに至り、「内在する」ことで「超越する」ことができると考え、超越運動と内在運動のそれぞれの終着としての「超一昇」と「超一降」の二概念を提示する。そして内在へ向かう超越こそが、「超越を超越する超越」であり、「もっとも大きな超越」だと主張する。

ヴァールは実存を、「超越」であり「自己の内に入ることで自己の外に出ること」として措定していた。それゆえ、この「もっとも大きな超越」とは実存であると思われる。

この「超越する実存」については、「世界内存在」であり「自己自身の外にあること」という、ハイデガーの実存の定義から説明される。実存とは「世界内」にあり、「自己自身の外」にあることだが、ヴァールは、形而上学がそれを問う者自身も問題にするゆえに、形而上学によって世界と自己が統合されると言う。かくて、外部を問うことは内部を問うこととなり、実存は内在へ向かう超越となる。

このような実存の例は、キルケゴールにおける実存である。キルケゴールにおいて、「神の前に立つこと」という超越は「罪の意識」という内在と同時である。このとき、過去の罪という実存が現在の超越する実存者を構築する。ヴァールによれば、このように、生きられた経験の経験に実存が存するのであり、これこそが「形而上学的経験」である。したがって、ヴァールにおける実存とは、「内在へ向かう超越」であり、「形而上学的経験」である。

押見 まり

はじめに

ソルボンヌ大学で教鞭を執った哲学者ジャン・ヴァール [Jean Wahl, 1888-1974] は、複数の哲学サロンの運営に携わり、既存の教育制度にとらわれない哲学教育の場「哲学コレージュ [Collège Philosophique]」を創設した。この「哲学コレージュ」は、当時まだ在野の哲学者であったレヴィナスの研究発表の場を提供した。レヴィナスは大学教員となることを勧めてくれたヴァールに感謝し、主著『全体性と無限』をヴァール夫妻に献じた。また、ヴァールはガブリエル・マルセルやハイデガー、サルトルなど同時代の哲学者たちを評する著作を執筆し、現代哲学の優れた紹介者と目されたほか、『形而上学・倫理学評論 [Revue de Métaphysique et de Morale, RMM]』の編集長やフランス哲学会 [la Société française de Philosophie] の会長を歴任し、当時のフランス哲学界で中心的な役割を果たした。このような華々しい経歴を持つ哲学者であるにもかかわらず、日本ではヴァール独自の思想についての研究は不十分である。近年ようやく本格的な研究が始まったが、その思想の全容解明には未だ程遠い。

そこで本稿では、ヴァール固有の思想を整理し跡付けることを目指し、ヴァールの思想における「実存」と「超越」の観念がどのようなものか、検討する。本稿での研究の手続きは以下の通りである。主な文献として『人間の実存と超越 [Existence humaine et transcendance, 1944]』を取りあげ、最初にこの著作の特徴、意図や方法を確認する。次いで、ヴァールの他の著作への参照も交えつつ『人間の実存と超越』の第一章と第二章の読解を通じ、「実存」と「超越」の観念を個別に検討する。最後に、「実存」と「超越」の観念のかかわりを考察する。

ヴァールの影響は、レヴィナスのみならず当時の思想界に対して多大であったと言える。それゆえ、ヴァール固有の思想の研究は、レヴィナ

スをはじめとする後代の思想家についての研究に大きく貢献するだろう。様々な分野から注目される現代哲学のひとつの源流を解明するためにも、ヴァールの「実存」と「超越」の思想の精確な抽出を目指したい。

1. 『人間の実存と超越』について

哲学史家として知られるジャン・ヴァールは、どのような思想を構想したのか。この問いに答えるに先立って、『人間の実存と超越〔*Existence humaine et transcendance*, 1944〕¹がいかなる特徴を具えているか、したがって考察にあたり、どのような配慮が求められるか確認しておこう。

『人間の実存と超越』は、レヴィナスが主著『全体性と無限』で参照したことで知られる²。そこでは、分離され、絶対的に他なるものを希求する運動がヴァールの言う「超一昇〔*transascendance*〕³になぞらえられているが、この「超一昇」には下方へと超越することを指す「超一降〔*transdescendance*〕」という対概念がある。これらの二概念は『人間の実存と超越』で提示される。

『人間の実存と超越』は1944年にスイスのバコニエール社から出版されているが、ヴァールを紹介する岡田松夫の論考「ジャン・ヴァール」には『人間の実存と超越』の発表年が1938年と記されている⁴。それゆえ当初は論文、発表、講演記録などとして世に出たものが、後年まとめられて出版された可能性もある。また、この著作の第三章には1937年12月のフランス哲学会年次大会でヴァールが行った、「主体性と超越」という発表原稿が収録されている⁵。そこには「超一昇」と「超一降」の語が見られることから、1930年代にはすでに、正反対の方向性を擁する超越をめぐる思考の萌芽が認められよう。

こうしたことがあってか、全体としての議論の過程は明晰とは言い難い。しかしながら『人間の実存と超越』は、『具体的なものへ〔*Vers le*

押見 まり

concret, 1932』や『実存主義史概要 [Ésquisse pour une histoire de « l'existentialisme », 1949]』⁶のように特定の哲学者の思想やその系譜を主題として論じるのではなく、実存と超越の観念を関連する諸観念とともに論じている。哲学的主題ごとに論じるこうした形式は、ヴァールの著作のなかでは、大著『形而上学概論 [Traité de Métaphysique, 1953]』⁷に先立つものである。したがって『人間の実存と超越』は、ヴァールがそれまでの様々な哲学者の思想を引き受けつつ、どのような思想を形成していったのか、より看取りやすい著作だと考えられよう。

2. 方法としての「アンチノミー」

前節では、『人間の実存と超越』の形式的な概要を確認した。本節では、「アンチノミー」という語に着目し、この語から『人間の実存と超越』におけるヴァールの哲学的営みがどのような意図の下で行われているのか検討する。

『人間の実存と超越』には、「アンチノミー [antinomie]」⁸という語が頻出する。この語は古代ギリシア以来の伝統的な哲学概念であるが、カントによってより深く規定された。一般に、「アンチノミー（二律背反）」はギリシア語では「法に反すること」と直訳でき、転じてつじつまの合わないことを意味する。この概念はカント以降、相反した二つの命題がどちらも一見正当に成り立ち、矛盾を形作ることを表すようになった。しかしヴァールがこの著作で用いている「アンチノミー」の語は、こうした一般的な意味とは異なる意味を指すように思われる。実際に、『人間の実存と超越』で「アンチノミー」の語が用いられる部分を例示しよう。

本稿第3節で見ると、『人間の実存と超越』の第一章では「実存」の問題が扱われる。そのなかでヴァールは、自己の内部の現象を増大させる立場と、自己の外部にある他者とのかわりを激化させる立場は「私」

を消失させる危険があると指摘し、真の実存には「私」と現象および他者とが共に存しなければならないと主張する。ヴァールはこのことを指して、「自己への再入と自己の外への退出」という「実存の新たなアンチノミー」と呼ぶ(EHT 30)。また、この部分を「新たなアンチノミー」と呼ぶことで、その前に提示されている、実存を分離と捉える立場と実存を完全性と捉える立場との対置(EHT 27)も「実存のアンチノミー」であることが示唆されている。しかしながら、「アンチノミー」と呼ばれるこれらの対置は確かに相反してはいるが、カントの言うような、理性の限界を示す矛盾というわけではない。

このように、『人間の实存と超越』で用いられる「アンチノミー」の概念は、それらが一般に指す意味とはかなり異なる意味で用いられていると言ってよいだろう。それでは、ヴァールは「アンチノミー」の概念をどのような意味で用いたのか。本稿では、「相補性 [complémentarité]」という概念を手掛かりにこの問題を考察してみたい。

「相補性」とは、デンマークの物理学者ボーアによって提唱された、量子力学の概念である。量子力学においては、光の粒子性と波動性のような⁹、相反する性質が互いに補い合うことで系の完全な記述を得られる性質を指す。岡田はヴァールの『形而上学的経験 [Expérience métaphysique, 1965]』¹⁰を参照し、この「相補性」の概念はヴァールの思想において、相反する命題が対立しつつ溶け合って現存するという観念に通じていると説明している¹¹。それゆえヴァールは、量子力学から転用した「相補性」概念を念頭に、相反する哲学的見解を記述していたと思われる。では、ヴァールの思想における「相補性」とはどのようなものなのか。ヴァールは、『形而上学的経験』のなかで次のように述べる。

哲学者は二律背反に直面している。[...] もし可能ならば、これらの二律背反をどのように超えることができるかを問わねばならないだろうし、それらを超えるのが、総合(ママ)によってか反対の一致によっ

押見 まり

てか、相補性によってかを吟味しなければならない。(EM 158)

ここで「相補性」は総合や反対の一致という弁証法の段階と並置され、二律背反を超えるための、いわば方法の一つとして提案されている。そしてヴァールは後の部分で、二律背反を超える方法としての「相補性」を総合や弁証法に代わるものとして提示しているのだ(EM 234, 283)。つまり、ヴァールにおける「相補性」とは、二律背反を超えるためのヴァール固有の方法だと言えるのではないか。

では、ヴァールは何のために二律背反を超えようとしているのか。ヴァールは、「相補性の観念が示すことは、[...] 人間に直面する実在というものがあるのだから、その実在を説明するためには、二つの矛盾した理論は余計なものではないということである」(EM 283)と述べている。ここからは、二律背反を超えることで人間に直面する実在についての説明が目指されていることが読み取れる。村松正隆はヴァールのこうした哲学的意図について、「ジャン・ヴァールの方法——その「相補性」を巡って」のなかで「ヴァールはただ否定するためではなく、各々の直観が持つ「方向」[...]を逆向きに辿りなおし、複数の直観が交錯する点に、これら諸直観を生み出した何ものかを描き出そうとしている」と推測する¹²。村松によれば、ヴァールは「相補性」という方法を採用することで、ある直観をさらに推し進めたり、諸直観の対立を克服したりするのではなく、むしろそれら直観の源であるような実在に迫ろうとしているのだ。

諸直観の源である実在とは何か。村松は、ヴァールの弁証法への姿勢を手掛かりにこの問題の考察を試みている。それによるとヴァールは、弁証法が他者との対立を通した存在者の自己展開の論理であるなら、弁証法自体もその存在を証しする他者とのかわりを通して自己展開せねばならず、それゆえに「相補性」が弁証法に置き換わりうると考えていた。つまり、反対のものを必ず想定する「相補性」の方法を弁証法にも適用することで、弁証法の存在を説明する「弁証法の他者」が示されること

になる。そして村松はこの「弁証法の他者」を、ヴァールが「実存の様態」と指定する「形而上学的経験」(EM 155)だと示唆する¹³。したがって、ヴァールが「相補性」という方法を用いたのは、「弁証法」を生み出す「形而上学的経験」を捉えるためと言える。

以上を踏まえ、『人間の実存と超越』に立ち戻ろう。『人間の実存と超越』は『形而上学概論』および『形而上学的経験』に先立つ著作だが、ヴァールの弁証法への姿勢は後年の著作に共通しているように思われる。『人間の実存と超越』の序文で、ヴァールは次のように述べる。

弁証法はそれ自体弁証法化される場合にしか真に弁証法ではない。私が言いたいのは、それぞれのものにとって代わる弁証法がそれ自体にとって代わらねばならないこと、そして非弁証法的な二項の間に場所を占めねばならないことだ。／このことは我々が、弁証法の出発点に、次いで到達点に、知覚の实在性に、そして脱自〔extase〕と神秘、超越の契機に、一瞥を投げかけるための機会になりうる。(EHT 16-17)

ヴァールはここで、弁証法それ自体にも弁証法が適用されねばならず、それによって弁証法が説明される出発点が示されると主張する。このような主張はまさしく、後年のヴァールの弁証法への姿勢に共通するものだ。それゆえ『人間の実存と超越』においても、弁証法の源に迫ることが目指されているのだ¹⁴。

『人間の実存と超越』が、後年の著作に共通する「弁証法の源に迫る」という意図の下で記されているとすれば、この著作でも後年の著作に類似した方法が採られていると考えられる。実際『人間の実存と超越』でも、ヴァールは後年の著作と同じように、一つの見解を提示した後でその見解に相反する見解を提示する。「相補性」の語こそ用いられないが、『人間の実存と超越』における様々な見解の提示の仕方は後年「相補性」と

押見 まり

名指される方法によく似ているように思われる。これらのことから『人間の実存と超越』における「アンチノミー」の意味が見えてくるのではないだろうか。すなわち、諸見解の源たる実在が示される、その諸見解の対が「アンチノミー」と名指されているのだ。哲学史上の問題をめぐる諸見解の源を探るためにそれらを「アンチノミー」として対にすると
いう意味では、ここでの「アンチノミー」は方法的であると評することもできるだろう。

以上のように、『形而上学概論』や『形而上学的経験』に先立つ『人間の実存と超越』においても、命題の対立を超越しようとするヴァール固有の方法が現れている。したがって、『人間の実存と超越』はヴァール固有の思想を積極的に看取できる著作の早い例であると言えよう。

最後に、以上のような議論はヴァールの評価にもかかわることを指摘しておこう。ヴァールはしばしば、哲学史を記述する「哲学史家」として扱われてきた。実際、彼の著作では哲学史上の様々な問題や、それら
をめぐる哲学者たちの諸見解が論じられ、ヴァール自身の思想についての積極的な記述は少ない。だが本稿で見たように、哲学史上の諸見解を対にしながらその源を探るという方法を採るヴァールの哲学は、換言すれば哲学史の記述そのものを方法とする哲学である。このように考えると、ヴァールを、哲学史をただ記述する「哲学史家」とする評価は不当であろう。むしろヴァールは、哲学史の記述を方法とする「哲学者」ではないだろうか。

3. 「内」と「外」が指し示す「実存」

前節では、ヴァールの著作『人間の実存と超越』で採用された方法について考察した。本節と次節では、前節までの議論を踏まえ、『人間の実存と超越』第一章と第二章の読解を通して「実存」と「超越」の観念が

どのように捉えられているか検討する。まずは、「実存」の観念について見てゆこう。

ヴァールの哲学史における立場については、一般には「実存主義」やその一派としての「パリ学派」に数えられていたが、ヴァール自身はその評を否定していたことが、ジャン・ラクローワ¹⁵や岡田によって記されている¹⁶。またヴァール自身も『実存主義史概要』の冒頭で、学生に「先生は実存主義者ですよ」と問われ、否定したと述べている(EHE 9/9)。

では、ヴァールは「実存」をどのようなものとして捉えていたのか。『人間の実存と超越』の第一章「実存について」を見てみよう。

ヴァールはまず、「実存」の観念が多様であることに言及し(EHT 26)、数多い「実存」の観念から「内部の努力とそれに対する外部の抵抗との緊張と合一」という観念を採用する。

実存は、内部への外部の抵抗によって、外部についての内部の努力によって、そしてとりわけ、両者のかかわりと合一によって定義されよう。というのもそこには、同様に、そして同時にこの内部とこの外部に感じ取られた合一があるからだ。(ibid.)

この箇所ではヴァールは、外部に対する主体の努力と、それに対する外部の抵抗を対として措定し、それらのかかわりと合一が実存を定義すると述べている。というのも、その二極は相反するだけでなく、一緒に「緊張関係」を作り上げることで、二極が合一した一つの関係として共存するからだ。そこから実存の観念に、アンチノミーを構成する緊張関係の強さとしての「激しさ[intensité 強度]」の観念が結び付けられる(ibid.)。

それでは、実存の定義を構成するアンチノミーとなる二項とは、具体的にはどのようなものだろうか。ヴァールは次のように述べる。

実存、実存することは語源的に、「～から出ること」「外に一立つこと」、

押見 まり

可能なものの王国からにせよ絶対的なものからにせよ、それらから出ることを意味する。[…] この意味において、ひとは実存がそれ自体によって不完全であり、絶対的なものからの切斷〔rupture〕として現前し、それ自体として、傷、亀裂であると語るように仕向けられるのだろう。／しかし直ちに、我々はこの観念に反論せねばならない。この不完全とこの傷と同時に、実存が同様につねに、完遂〔achèvement〕と完全の手法〔manière〕であることだ。我々がアリストテレスにおいて完全態エンテレケイアの概念のうちに見出す古典的な観念は、デカルトにおいては、その代わりに実存の度合いが完全の度合いに対応する。(EHT 27)

ヴァールはここでまず、「実存〔existence〕」「実存する〔exister〕」という語が「外に一立つ〔ex-sistere〕」と綴ることに着目し、切り離された不完全なものとしての実存の観念を示す。しかしその一方でヴァールは、アリストテレスとデカルトを念頭に、傷のない「完全性」としての実存の観念も提示する。アリストテレスは、生成する実在が「完全態〔entéléchie 目的内含状態〕」となることで、それが有するすべての可能性が現実存在することになると考えた。またデカルトは『第五省察』で、神は完全であるゆえに存在の観念を含意し、それゆえ神は現実存在するという証明を行っている¹⁷。ヴァールは、実在性と完全性が結びついたこれらの思想から、完全性としての実存の観念を見出しているのだ。

かくて実存の観念は、不完全性と完全性とが緊張しつつ共存するものであり、本質〔essence 存在〕を規定できず、したがって本質から推論されえない、還元不能なものとして描かれる (EHT 28)。

しかしヴァールは、上で述べたような実存は制限されており、実存は「内容〔contenu〕」と「客体〔objet〕」を有する場合にのみあると述べる (ibid.)。というのも、「私の実存する」とは、「私」が「ただそこにいる」ということだけを指すのではなく、「私」が「私として存在する」ことでもある

からだ。それゆえ「具体的な [concret]」、つまり「体を具えた」実存は、その実存の様態を「内容」として持たねばならない。したがって、実存に対する「感情 [sentiment]」がしばしば実存の観念のように叙述される。かくて実存は、多様な内容を有するとされる。

このような実存の感情は、「私」単独では生起しえない。それゆえヴァールは、「具体的な実存は、つねに、作品の前か行為のうちにある、あるいは他の存在に面する実存である。ある実存は、自己とは異なるものとの関係なのだ」(EHT 29)と述べる。つまり、実存の内容としての感情を持つためには、自我から出て他者とかわる必要があるのだ。ここから、「自己の内部と外部」としての実存のアンチノミーが導かれる。

ヴァールは、ポーサンクト¹⁸やプルーストのように現象としての実存の内容を増大させる立場と、キルケゴールや神秘主義者らのように他者とのかわりの激しさを実存とする立場を対置しながら、どちらの立場も「私」の消失に到達し、結果として具体的な実存が失われる危険があると批判する(EHT 30)。かくてヴァールは、真の実存の条件として「私」があることを挙げる。

恒常的な自我におけるこの現象の奪回がある場合にしか、少なくとも、これら現象がそれに比して秩序づけられるような、ある中心の現れがある場合にしか、真に実存はないということ [である]。そこには核 [noyau] が——しかも、このメタファーが相いれうるならば、放射 [rayonnement] が、なくてはならない。(ibid.)

実存の内容にせよ他者との緊張にせよ、それらを増大させることでは、結局具体的な「私」の実存は失われてしまう。だが、実存の内容をなす感情や感情を触発する他者がなければ、実存は形骸化し、具体性は失われる。それゆえ具体的な実存が成立するには、「核」としての自我と、「放射」としての感情および他者とが共存せねばならない。かくて、「自己へ

押見 まり

の再入と自己の外への退出」が実存を示すアンチノミーとなる (ibid.)。

ヴァールは、この分析により、ひとは実存にではなく感情に対して自分を見出すことが示され、それゆえ問題は実存の現象学から、決して到達できないものとしての実存の研究へ移行すると述べる。この研究において実存に到達できないのは、ヴァールによれば、実存が、「私」や「彼」といった実存する者、また未来形や過去形といった「実存する」という語の「活用 [conjugaison]」によって多様だとされてきたからだ。こうした考え方に従えば、実存は現在ではなく、キルケゴールとハイデガーの言うように、過去と未来に属することになる (EHT 31-32)。しかしヴァールは、このような考え方を否定する。

しかしながら、私は実存が唯一的に過去あるいは未来のうちにあるとは思わない。実存は、実存する存在がそれによって破壊され構築されるような行為 [l'acte] のうちに——あるいは、諸行為 [les actes] のうちに——ある。というのも、実存は実存それ自体の不断の破壊と構築であるからだ。そして、実存とは、この実存者がそれ [行為] によって過去と未来のうちに見られるだけでなく、そのような未来と過去をもつ者であることとしての現在そのもののうちに構成されるような諸行為のうちにあるのだ。(EHT 32)

ヴァールはここで、実存そのものが自らを不断に破壊し構築するものであるゆえに、実存は実存する者が自らを破壊しつつ構築する行為にあると言う。そして「破壊し構築する行為」とは、過去と未来における実存者の構築に加え、その過去と未来における構築そのものが現在における実存者を構築するような行為なのだ。ここに看取できる「破壊と構築」のアンチノミーとしての実存は、「不完全性と完全性」のアンチノミーとしての実存につながるものと言えよう。

以上のように『人間の实存と超越』の第一章「実存について」では、ヴァー

ルが実存を、「不完全性と完全性」「自己への再入と自己の外への退出」といったアンチノミーが指し示すものと捉えていることが読み取れる。つまりヴァールの考える具体的な実存とは、分離するとともに完全性として成就する構造を有し、「内容」と他者との間で、自己の内へ入ることによって自己の外へ出ることなのだ。

このように実存を「自己の内に入ることで自己の外へ出ること」と捉えることで、実存の問題に、内部としての「内在〔immanence〕」と外部としての「超越」の問題がかかわってくる。かくて、ヴァールの探求は「超越」の問題へと向かうことになる。

4. 二方向の超越

前節では、ヴァールの考える実存が「自己への再入と自己の外への退出」というアンチノミーで示されるゆえに、実存の「超越」が問題となることが明らかになった。ヴァールは「超越」をどのように捉えたのか。『人間の実存と超越』第二章「超越について」を見てみよう。

ヴァールはまず、超越の観念には「運動〔mouvement〕」と「終着〔terme〕」が同時に含まれていると指摘する。これは、「超越」という語が、「何かを越える」運動としての意味と、運動が目指す終着である「超越者」としての意味とを有することである。それゆえヴァールは、超越を「努力の観念と、努力の成就と消失としての終着の観念との結合」と措定する（EHT 34）。そして、それら二つの意味の間には緊張がある。

もし運動の超越〔transcendance-mouvement〕が終着としての超越によって説明されるなら、厳密には超越はもはやそこにはない。／もし終着の超越〔transcendance-terme〕が運動の超越によって説明されるとしたら、同様にそれ〔終着の超越〕は運動の超越のうちにあ

押見 まり

るはずだ。／したがって、運動とその終着の間には緊張があり、終着も運動も、所与としても、他による一としても、他なき一としてもみなされるべきではない。(EHT 35-36)

もし超越の運動がその運動の目的のためだけにあるなら、運動は途上の過程にすぎず、終着なしにただ「越え出る」運動は「超越」としての意味を失う。同様に、終着としての超越が運動の帰結にすぎないなら、運動のない終着は超越ではなくなる。このように運動の超越と終着の超越は、互いに独立して「超越」という意味を有する緊張関係にあるが、片方なくしては「超越」という意味を失う不可分な関係でもある。かくて、「超越」の観念も「運動と終着」のアンチノミーを有する。

そしてヴァールは、運動する超越における内在と超越の関係に目を向け、「ひとが超越の運動の極点に達するとき、そこにはもはや内在と超越の間の分離はない」(EHT 36)と述べる。だがそれは、内在と超越が元来分離しているという意味ではない。ヴァールによれば、内在や超越を単独で考えることはできないからだ。我々は、超越のひとつの方法、あるいは内在のひとつの方法としてしか、内在と超越を捉えられない(EHT 36-37)。このように、内在と超越は相互に意味づけ合っている。いわば、内在と超越は対立項でありながらも、その間には不可分な関係があると言える。つまり、内在と超越の両者もアンチノミーとなっているのだ。したがって、「超越する」ことで「内在する」ことに至り、「内在する」ことで「超越する」ことができる。ここからヴァールは、「超越」は上だけでなく、下にもあるのではないかと提案する。

超越の階層〔une hiérarchie〕あるいは同様に諸階層〔des hiérarchies〕を考えることができる。そう言っているなら低いところへ導かれた階層、ローレンスが我々に未知の神を示したときに彼が意識していた階層が、我々の下に、存在の腕に抱かれて、未知の神が、ある。

超一昇があるだけではなく、超一降もあるのだ。(EHT 37)

超越することで内在し、内在することで超越するなら、これらの運動の終着としての「超越」も、超越運動と内在運動のそれぞれにあることになる。かくてヴァールは、内在運動の末にある超越として「超一降〔transcendence〕」を提示する。

では、内在することによる超越とはどのような超越なのか。ヴァールによると、それは超越それ自体を超越するような超越である。そしてヴァールは、「おそらくもっとも大きな超越は、超越を超越することに、つまり内在のうちに再び落ちることに存する超越である」(EHT 38)と主張する。というのは、超越が自身を越え出ようとするとき、超越は自らの「超越する」運動を破壊し、「内在する」ことに反転するからだ。それゆえ、内在へ向かう超越は「超越を超越する超越」であり、「もっとも大きな超越」なのだ¹⁹。こうした思想は、ヴァールの後の著作においても保持されている(TM 721, EM 14)。

ところでヴァールは『人間の实存と超越』第一章の注のなかで「実存の哲学は超越の哲学である。〔…〕実存は超越する」(EHT 29)と述べている。そしてその実存は、「自己の内に入ることで自己の外に出ること」と考えられていた。これらのことから、「実存」そのものが内在へと向かう「もっとも大きな超越」だと考えられないだろうか。だがそうだとすれば、「超越する実存」とはいったいどのようなものなのか。次節では、この問いについて考察する。

5. 超越する実存

前節の末尾で、ヴァールが「もっとも大きな超越」として措定する「内在へ向かう超越」が実存そのものと考えられることを指摘した。だが、「私

押見 まり

の存在」である実存が「超越」であるとはどのような事態なのか。

ヴァールによれば「実存と超越の二つの概念は、世界一内一存在の概念のうちで […] 合流する」(EHT 29)。この「世界内存在」の語がハイデガーから借用されていることは言を俟たない。では、ヴァールはこの語によって何を指しているのか。先取りすれば、ヴァールが着目するのは「世界内存在」という語で他者や道具的存在者との現存在の共存存在が提示されることだと思われる。ヴァールは複数の著作で、実存が孤立したのではなく、他者によってのみ存在するのであり(EHT 28, 29, EM 292)、そのことこそハイデガーが指摘したことだと述べている(EM 292)。

さらに、ヴァールがハイデガー思想において「世界内存在」と並んで着目するのが、「実存 [ex-sistere]」が字義通り「自己自身の外にあること」と定義されることである(EM 282etc.)。かくて、実存とは「世界内存在」であり、「自己自身の外にあること」と定義されることになる。

しかしヴァールによれば、世界と自己は、完全にはないが、形而上学によって統合される(EM 282)。というのも、世界を研究する量子力学は世界の構成要素の場所を定められないことを解明し(EM 253)、世界や存在といった一般的概念の研究としての形而上学に到達するのだが、その一般的概念はそれを問う者自身についても問題にするからだ(EM 13-14, 287-288)。それゆえ、「世界内存在」であり「自己自身の外にある」実存は、「自己の内にあること」と「自己の外にあること」が両立するアンチノミーと化す。ヴァールはこの事態を、「人間は常に自己自身のかなたにある […]。しかしこの自己自身の彼岸は、究極的には、この彼岸の起源、源泉は彼自身であるという意識を持たねばならないし、したがって、超越は内在へと曲げられていく」(EM 282)と言い表している。つまり、問う者自身をも問う形而上学によって、外部について問う超越の問題が、自己自身について問う内在の問題へと、自己を問うことが外部を問うことへと変容するのだ。かくて実存は形而上学により、「超越すること内で

在」し、「内在することで超越する」のである。

このような実存は、ヴァールが特に参照する思想家の一人、キルケゴールの思想に見られる実存の両義性を思わせる。ヴァールは、キルケゴールがキリスト者の実存として措定する「神の前に在ること」が「罪」という反定立を含むことを指摘している。

しかし神の前に在ると意識することは、何よりも先ず罪人であるということであり、罪、とりわけ罪の意識によってひとは信仰生活に入るということである。従って実存するとは罪人であることでありまた、他方において実存するとは最高の価値なのである。よって実存は最高の価値であると同時に罪なのである。(EHE 16/14)

人間を越える者である神の前に立つことはまさに超越することである。しかし、超越するためには自らの罪を内省することが不可欠であり、あるいは罪を内省することでひとは超越する。この構図はまさに、「内在することで超越し、超越することで内在する」運動だと言える。

ここに、3節で言及した「破壊と構築」という実存のアンチノミーが看取できよう。罪を自覚し悔悛するとき、過去に構築された罪を犯す実存者は破壊されるのだが、「罪を犯した」という過去の実存そのものが、「罪人」という現在の実存者を構築し、それによって実存者は「神の前に立つ」ことへと超越する。ヴァールは、こうした行為のうちに実存があると述べていた (EHT 32)。かくて「内在することで超越する」実存とは、このように、生きられた経験を経験することにあると言えるのではないか。この「経験の経験」²⁰こそ、ヴァールが描き出そうとしていた「形而上学的経験」であろう (EM 283)。ヴァールの思想における「実存」は、「内在へ向かう超越」であり「形而上学的経験」なのだ。したがって、ヴァールは自身の哲学を通して実存に迫ろうとしていたと言える。そして、このように「私の経験」としての実存を問うことで外部性や超越をも問う

押見 まり

哲学は、「私の生の経験」を具に描きとり、内部性と外部性を問うたレヴィナスの思想にも通ずると考えられるのではないだろうか。

おわりに

ジャン・ヴァールの思想の核となる観念の抽出を目指し、「実存」と「超越」の観念を考察してきた。

まず、『人間の実存と超越』における哲学的営みの方法を考察するにあたり、同書でたびたび用いられる「アンチノミー」という概念に着目した。しかしこの「アンチノミー」は、カント的な、理性の限界を示す命題の対ではない。そこでヴァールにおける「アンチノミー」の役割の考察に際し、後年の著作に見られる「相補性」の概念を手がかりとして取りあげた。ヴァールは『形而上学的経験』のなかで、二律背反を超える方法としてこの「相補性」を提示し、さらには総合や弁証法にとって代わるものとして措定している。「相補性」によって二律背反を超えようとするのは、「人間に直面する実在」を説明するためである。村松正隆によると、この「人間に直面する実在」とは諸哲学的直観の源である。ヴァールは「相補性」によって諸直観を生み出す源としての、哲学的問題の「経験」に迫ろうとしているのだ。その源に迫るためには、諸直観の展開である弁証法それ自体も弁証法化され、他者とのかかわりによって説明されねばならない。それゆえ、ある直観の弁証法に「相補性」を適用し、弁証法の他者たる「形而上学的経験」を描こうとしたのだ。

このような弁証法への姿勢は『人間の実存と超越』においても看取される。ゆえに、同書における方法も後の著作の「相補性」と同様であると思われる。すなわち、『人間の実存と超越』では、ある問題の「経験」を指し示す諸見解の対が「アンチノミー」と名指されているのだ。それゆえ、『人間の実存と超越』は後の著作に先立って、ヴァール固有の思考

を看取できる著作だと言える。そして、このような方法は、ヴァールの哲学的営みが単なる哲学史記述ではなく、哲学史の記述を方法とする「哲学」であったことを証することになる。

ヴァールは「実存」と「超越」の観念をどのようにとらえたのか。ヴァールによれば、「緊張関係」という形でかかわり、合一する「内部の努力と外部の抵抗」が、実存を定義する。そして、このアンチノミーを構成するのが「分離・不完全性と成就・完全性」としての実存の観念である。しかし、「具体的な」実存にはこのアンチノミーに加えて「他者」と「内容」が必要である。そこから、実存の内容としての「感情」を増大させる立場と、他者との緊張関係の激しさを実存とする立場との対立が提示される。だがヴァールはいずれの立場も自我が失われうるとして、具体的な実存は得られないと考える。それゆえ、具体的な実存は「他者」と「内容」に対する、「自己への再入と自己の外への退出」というアンチノミーが指し示すものである。よって、ヴァールの考える具体的な実存とは、分離すると同時に完全性として成就する構造を有し、「内容」と他者との間で自己の内へ入ることによって自己の外へ出ることなのだ。

続いてヴァールは、「超越」の観念に「運動」と「終着」が同時に含意されていると指摘し、超越を「努力の観念と〔…〕終着の観念との結合」というアンチノミーとして措定する。次に、運動する超越における内在と超越の関係が着目される。ヴァールによれば、内在や超越は単独で思考されえず、超越のひとつの方法、あるいは内在のひとつの方法としてしか、それらを捉えることはできない。この意味で、内在と超越は意味づけ合っており、対立項でありながらも、不可分な関係を持つ。かくて、内在と超越の両者もアンチノミーを構成することになる。そこからヴァールは、「超越する」ことで「内在する」ことに至り、「内在する」ことで「超越する」ことができると考え、超越運動と内在運動のそれぞれの終着として「超一昇」と「超一降」の二つの超越概念を提案する。そして、自身が新しく提案した内在へ向かう超越が「超越を超越する超越」であり、

押見 まり

「もっとも大きな超越」であると言う。ところで、定義からして「超越」であり、「自己の内に入ることで自己の外に出ること」として指定された実存こそが、この「もっとも大きな超越」だと思われる。

「超越する実存」についてヴァールは「世界内存在」であり「自己自身の外にあること」という、ハイデガーの実存の定義に着目する。ここから、実存とは「世界内」にあり「自己自身の外」にあることとなるが、ヴァールは形而上学によって世界と自己がある程度統合されると言う。というのも、世界や存在の一般的観念を問う形而上学が、それを問う者自身も問題にするからである。かくて、ヴァールはハイデガーの実存の定義を「人間は常に自己自身のかなたにある。しかしこの彼岸の源泉は彼自身である」と言い換える。

このような実存の例として、キルケゴールにおける実存の両義性が挙げられる。キルケゴールにおいて、「神の前に立つこと」という超越は「罪の意識」という内在によるものだからだ。このとき、過去の罪という実存が現在の実存者を構築し、超越へと導く。ヴァールによれば、罪の内省のように生きられた経験を体験することに実存が存するのであり、この「経験の経験」こそが「形而上学的経験」なのだ。したがって、ヴァールにおける実存とは「内在へ向かう超越」であり、「形而上学的経験」であると結論できよう。

以上から、ヴァールは自身の研究において「アンチノミー」ないし「相補性」という方法を用い、「実存」と「超越」が「自己の内に入ることで自己の外に出る」というアンチノミーによって示されるものと捉えたことが明らかになった。しかし、こうしたヴァールの研究には、未だ不明瞭な部分が残る。例えば、なぜヴァールは「弁証法」に代わる「相補性」の概念を構想したのだろうか。なぜ弁証法に弁証法を適用することを選ばなかったのか。また、岡田松夫が指摘する通り、「超越を超越する超越」が「もっとも大きな超越」とされているが、そもそも超越される超越は超越たりうるのか。本稿で応答することができなかった、こういった点

については、今後深めるべき課題としたい。

-
- ¹ Jean Wahl, *Existence humaine et transcendance*, Éditions de la Bacconière, Neuchatel, 1944. 以下、この著作からの引用および参照は本文中に略号（EHT）と頁数を付す。なお、引用文はすべて引用者による訳である。
- ² Emmanuel Levinas, *Totalité et infini: Essai sur l'extériorité*, 1961 (Le Livre de Poche, 2016 (Original edition: Martinus Nijhoff, 1971)), p. 24 (『全体性と無限』熊野純彦訳、岩波文庫、2005年、43、44頁)。
- ³ 「transascendance /transdescendance」は通常、「上昇的超越／下降的超越」と訳されるが、それぞれがフランス語の「超越〔transcendance〕」と「上昇〔ascendance〕／下降〔descendance〕」の融合語であること、さらに、原文の他の箇所に「上昇／下降する超越〔transcendance ascendante/descendante〕」などの表現が併用されることも鑑み、本稿ではこなれていない響きのある「超一昇／超一降」をあえて訳語とした。
- ⁴ 岡田松夫「ジャン・ヴァール」『現代フランス哲学』、フランス哲学会 澤瀉久敬編、雄渾社、1968年、392頁。
- ⁵ この原稿は、以下の書籍にも収録されている。Cf. Jean Wahl, « Subjectivité et transcendance » dans *Kierkegaard L'Un devant l'Autre*, Hachette Littératures, 1998, pp. 205-220.
- ⁶ Jean Wahl, *Ésquisse pour une histoire de «l'existentialisme»*, L'Arche, 1949 (2001) (ジャン・ヴァール「実存主義史概要」『実存主義的人間』永戸多喜雄訳、人文書院、1953年)。以下、この著作からの引用および参照は本文中に略号（EHE）と頁数/日本語版頁数を付す。
- ⁷ Jean Wahl, *Traité de métaphysique*, Payot, 1953. この著作からの引用および参照は本文中に略号（TM）と頁数を付す。
- ⁸ 「アンチノミー」はしばしば「二律背反」と訳されるが、後述する通り、ヴァールの用法は「二律背反」が一般に指す意味とは異なる。そこで本稿ではカタカナで「アンチノミー」と表記する。
- ⁹ 1900年、物理学者マックス・プランクが、物質が放射する電磁波（光）の原因である熱エネルギー、すなわち振動エネルギーに最小単位があるという理論を提唱した。1905年、アインシュタインはこの理論を推し進め、電磁波自体が粒子だと考え、「光量子」と呼んだ（現代では「光子」と呼ばれる）。ボーアは、プランクとアインシュタインの「量子仮説」を電子のエネルギーに適用し、「ボーアの量子条件」という規則を考案した。その後ボーアの量子条件から、ルイ・ド・ブロイが電子も粒子であり波であるという仮説を提唱した。
- ¹⁰ Jean Wahl, *Expérience métaphysique*, Flammarion, 1965 (ジャン・ヴァー

押見 まり

ル『形而上学的経験』久重忠雄訳、理想社、1977年)。以下、この著作からの引用及び参照は本文中に略号(EM)と日本語版頁数を付す。

- ¹¹ 岡田、前掲書、408頁。
- ¹² 村松正隆「ジャン・ヴァールの方法——その「相補性」を巡って(北海道哲学会・北大哲学会共催シンポジウム《現代哲学の水脈を求めて》)『哲学年報』58号、北海道哲学会、2011年、10頁。
- ¹³ 同、10-13頁。
- ¹⁴ ヴァールが「弁証法の他者」を考えるに際し、弁証法に弁証法を適用するのではなく、なぜわざわざ「相補性」概念を用いたのか、という問題に関しては検討の余地があろう。そのためには、ヴァールにおける「相補性」と「弁証法」の差異についても検討されねばならない。こうした問題は、今後取り組むべき課題とした。
- ¹⁵ ジャン・ラクロワ [Jean Lacroix] (1900-1986)、フランスの哲学者。エマニュエル・ムーニエとともに雑誌「エスプリ」を立ち上げ、また1945年から1980年にかけて「ル・モンド」紙で哲学についての時評欄を担当した。
- ¹⁶ 岡田、前掲書、393頁。ラクロワの記述については、ヴァール死去の三日後に「ル・モンド」紙に掲載されたラクロワによる追悼記事を参照。Cf. Jean Lacroix, « Un dialecticien de la tension, Jean Wahl est mort », *Le Monde*, 22 juin 1974.
- ¹⁷ Cf. ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2006年、102-103頁。
- ¹⁸ ボーサンケット [Bernard Bosanquet] (1848-1923)、イギリスの哲学者。ヘーゲルなどの影響を受けて観念論的立場に立ち、論理を全体としての真理を把握する試みと捉えた。
- ¹⁹ 岡田松夫はこうした超越概念について、「超越されるような超越を超越といいうるか疑問である」と述べ、ヴァールの哲学が徹底を欠くとも言えると示唆している(岡田、前掲書、410頁)。この点については、さらなる研究の余地があろう。
- ²⁰ Emmanuel Levinas, Xavier Tilliette, Paul Ricœur, *Jean Wahl et Gabriel Marcel*, Beauchesne, 1976, p.24 (「ジャン・ヴァール——所有することも存在することもなく」『外の主体』合田正人訳、みすず書房、1997年、129頁)。

参考文献

【ヴァールの著作】

Jean Wahl, *Existence humaine et transcendance*, Éditions de la Bacconière,

Neuchatel, 1944.

この著作からの引用および参照は本文中に略号(EHT)と頁数を付す。なお、引用文はすべて引用者による訳である。

Jean Wahl, *Ésquisse pour une histoire de «l'existentialisme»*, L'Arche, 1949 (2001) (ジャン・ヴァール「実存主義史概要」『実存主義の人間』永戸多喜雄訳、人文書院、1953年)。

この著作からの引用および参照は本文中に略号(EHE)と頁数/日本語版頁数を付す。

Jean Wahl, *Traité de métaphysique*, Payot, 1953.

この著作からの引用および参照は本文中に略号(TM)と頁数を付す。

Jean Wahl, *Expérience métaphysique*, Flammarion, 1965 (ジャン・ヴァール『形而上学的経験』久重忠雄訳、理想社、1977年)。

この著作からの引用および参照は本文中に略号(EM)と日本語版頁数を付す。

Jean Wahl, *Kierkegaard L'Un devant l'Autre*, Hachette Littératures, 1998.

【その他単行本】

Emmanuel Levinas, *Totalité et infini: Essai sur l'extériorité*, 1961 (Le Livre de Poche, 2016 (Original edition: Martinus Nijhoff, 1971)). (レヴィナス『全体性と無限』熊野純彦訳、岩波文庫、2005年)

Emmanuel Levinas, « Jean Wahl – Sans avoir ni être » dans *Jean Wahl et Gabriel Marcel* (Emmanuel Levinas, Xavier Tilliette, Paul Ricœur), Beauchesne, 1976, pp. 13-31 (「ジャン・ヴァール——所有することも存在することもなく」『外の主体』合田正人訳、みすず書房、1997年、113-139頁)。
岡田松夫「ジャン・ヴァール」『現代フランス哲学』、フランス哲学会 澤瀉久敬編、雄渾社、1968年、389-413頁。

合田正人『思想史の名脇役たち——知られざる知識人群像』河出書房新社、2014年。

ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、ちくま学芸文庫、2006年。

サロモン・マルカ『評伝レヴィナス——生と痕跡』斎藤慶典、渡名喜庸哲、小手川正二郎訳、慶應義塾大学出版会、2016年。

ジャン・ラクローワ「ジャン・ヴァールの形而上学的経験」『現代フランス思想の展望』野田又夫、常俊宗三郎訳、人文書院、1969年、153-157頁。

【論文等】

Jean Lacroix, « Un dialecticien de la tension, Jean Wahl est mort », *Le Monde*, 22 juin 1974.

押見 まり

村松正隆「ジャン・ヴァールの方法——その「相補性」を巡って(北海道哲学会・北大哲学会共催シンポジウム《現代哲学の水脈を求めて》)」『哲学年報』58号、北海道哲学会、2011年、1-17頁。

水野浩二「主体性と超越性—ジャン・ヴァールの「キルケゴール論」をめぐる—」『札幌国際大学紀要』46号、札幌国際大学、2015年、69-76頁。